

熱田神宮 宝物館だより

熱田神宮宝物館

編集 内田雅之

〒456-8585

名古屋市熱田区神宮一丁目1番1号

TEL (052) 671-0852 FAX (052) 671-1202

(年6回発行)

3月展示品より



重要文化財
さいえのひおうぎ
彩繪檜扇 (古神宝類)
木製著色 1握
長 39.7cm 上幅 4.2cm
室町時代

当神宮の御祭神のために
調進された檜扇で、現在3
握を所蔵する。桧の薄板を
重ねたもので、親骨ともに
36枚からなる。

籐を石畳状に結んで要とし、表裏ともに胡粉を全体に塗り、本握は片面に漁村の風景、反対側には蒲穂に
翡翠の意匠が描かれている。他の2握には峻険な岩山と松樹に竹樹と群雀、紅梅と白梅を描き分けている。

当神宮や熊野速玉大社所蔵の檜扇などの古例を見比べると、遠景と近景を表裏で描き分け、意匠が松竹梅
や瑞鳥となるなど吉祥を感じさせるものが多い。



3月平常展 — 熱田神宮宝物展 —

3月2日(金)～3月27日(火)
(期間中無休)

※展示品は毎月入替いたします

— 展示品より —



脇指 銘 伯耆守藤原信高 1口 江戸時代
長 41.1cm 反り 0.7cm

平造、庵棟、身幅広く寸延び、重ねやや薄く、反りのついた堂々たる姿。板目肌に柁を交えて肌立ち地沸つく地鉄に、刃文は大どかなのたれで、元に互の目が交じり、小沸つき、明るく冴える。帽子は表裏共直ぐに尖りごころとなり、長めに返る。茎は生ぶで先栗尻、鑓目勝手下がりとなる。刀身の指表に「奉寄進 熱田大神宮 御宝前」、指裏に「慶安戊子年五月五日 中瀬村森徳十郎一吉」と寄進にかかる切付銘を遺す。

初代信高は美濃三阿弥兼国の末葉で、天正の頃清洲に住み、織田信長の陣刀を打ち、「信」の一字を賜ったと伝えている。氏房・政常と共に尾張三作の一人で、代々尾張藩御抱工となっているが、初代の確実な作は少なく貴重である。

その他の主な展示品

◎重文 ○景文

《書跡・古文書》 ◎日本書紀(巻第十二) ○極細字法華經 徳川吉宗知行朱印状 他

《絵画》 鶴の図-狩野梅斎筆- 有職文装飾画帖-冷泉為恭筆- 鷹の図-石川英鳳筆- 鶉鳥図 他

《工芸》 ◎襪 ◎朱漆弓 ◎入帷残欠(古神宝類) 木瓜紋散双鶴鏡 水瓶散双鶴鏡 鳥居文様瓶子

《刀剣》 ○剣 無銘(三鈷柄俱利伽羅剣拵) 太刀 銘 兼房 脇指 銘 兼道 短刀 銘 政常 他

《コーナー展示 幕末から明治へ》 孝明天皇繪旨 孝明天皇御沙汰書 明治天皇収獲叡覽之図-森村宜稻筆-

○明治天皇御奉幣大判 明治天皇尊影 天皇旗 吉田松陰書状 坂本龍馬肖像画-公文菊僊筆- 他

4月平常展 — 熱田神宮宝物展 —

3月30日(金)～4月24日(火)

(期間中無休)

※展示品は毎月入替いたします

— 展示品より —

どちらも蓬萊鏡ほうらいきょう (左:蓬萊柄鏡 面径20.1cm 江戸時代 右:蓬萊鏡 面径23.9cm 室町時代)



これらの鏡は、ともに不老不死の仙人が住むという、伝説上のユートピア、「蓬萊」の情景を鏡背文様としてあらわしたものです。大陸の古い地理書、『山海経』によれば、蓬萊は東方海中にあり、しんきろう 蜃気楼に包まれたように見えるが、人はなかなか近づくことができない、とされています。

向かって右の鏡は中央に亀甲鈕きつこうちゆうを据え、手前に海、そして背後に洲す浜はまを配し、右遠方には屹立する岩山に松が生え、左では2羽の鶴が戯れるという典型的な蓬萊鏡の構図です。時を経て意匠も簡略化されますが、中央に亀甲鈕、右に松、左に鶴の配置は踏襲されます。

変わって向かって左の柄鏡を見てみると、中央に亀のような動物が首をもたげています(下段部分)。そして甲羅には岩が乗り、松・竹・梅や菊・橘など縁起のいい樹木が生えている様子が窺えます。

この動物は、麒麟・鳳凰・応龍とともに四霊の一つ、「靈亀」という瑞獣として大陸の古代神話に登場しています。実はこの靈亀の上に岩山や樹木の乗った構図こそが蓬萊山であるという説もあります。

わが国にも蓬萊山という神仙思想が伝わり、古来、風光明媚な場所、つまり、富士山・熊野(新宮市)、そしてこの熱田の地が「三蓬萊」として挙げられています。『熱田宮秘釈見聞』という書物には当神宮が鎮座する熱田台地の地下には金色の巨大な亀が潜んでおり、頭・胴・

尻尾の部分にそれぞれ上知我麻神社(当時)・本宮・高座結御子神社があると記されています。

熱田の蓬萊伝説、地図を片手に参拝方々周囲を散策されては如何でしょうか。

その他の主な展示品

◎重文 ○県文

- 《書跡・古文書》 ○法華經安樂行品 ○寛永十三年熱田万句 尾張国熱田太神宮縁起 徳川家重知行朱印状 他
 《絵画》 旭日桜花-横山大観筆- 春景山水図-村瀬環山筆- 桜花春陽-中沢弘光筆- 春之神宮-小林松僊筆-
 《工芸》 ◎黒漆根古志形鏡台 ◎錦包挿鞋 ◎入帷残闕 木造舞楽面 陵王 木造舞楽面 納曾利 他
 《刀剣》 ◎太刀 銘 元弘三年六月一日実阿作 ○太刀 銘 豊後国行平作 脇指 銘 豊後州住正宗 他
 《コーナー展示 ～熱田をめぐる人々～》 ◎後花園天皇宸翰御消息 ◎足利義教御内書 ◎太刀 銘 国友
 ◎菊蒔絵手箱 織田信長黒印状 菅公坐像 豊臣秀吉禁制 徳川家康判物 孝明天皇綸旨 他

—展示品より—

熱田神宮にまつわる神々と偉人たち（その6） ～源平、熱田の地に集う～

「熱田神宮 創祀千九百年」 斎藤吾朗筆



以前の号では、琵琶の名手であった藤原師長や西行法師と当神宮との関わりを紹介して来ました。今回は平安時代末期から鎌倉時代に活躍した英雄たちと当神宮のご縁を紹介したいと思います。

狩衣に採烏帽子を著け、太刀を預けて坐すのは、わが国で初めて征夷大將軍として武家政権を樹立した源頼朝です。『平家物語 剣之巻』には、源家重代の太刀を平家に奪われないよう草野庄司に預け、外祖父の社である当神宮に奉納するよう指示したとあり、本画はその場面を描いたものです。頼朝の生涯は、歴史の教科書や既刊の書籍を読んでご

承知のことと思いますが、実は当神宮と密接な繋がりを持っていることを皆さんご存知でしょうか。

頼朝は久安3年、源義朝の三男として出生します。頼朝を生んだこの女性こそ当神宮大宮司藤原季範の娘、由良御前です。藤原季範は大宮司でありながら、当時都で過ごしていました。よって両家の出逢いは十分考えられることです。そして社伝では身ごもった由良御前はこの熱田において頼朝を生んだとされます。当神宮境内の西方にある誓願寺は、大宮司家屋敷の跡地に建てられたもので、当時、由良御前はその屋敷で頼朝を生んだとされます。よって同寺院には頼朝の産湯に用いた井戸（戦後再建）が遺され、門前には明治33年に建立された「右大將頼朝公誕生舊地」の石碑があり、それも本画に描かれています。

そして頼朝の下で垂垂を著し、手に中啓を携えているのが頼朝の弟、源義経です。軍記物語の一つ『義経記』巻二には「遮那王殿元服の事」として、義経が都の北方鞍馬より奥州へ向かう折のことが記されています。それによると、奥州藤原氏のもとへ向かうに当たり、幼名のままでは具合が悪いため、兄頼朝の母の実家であるこの熱田で元服をすることとなりました。そして精進潔斎のうえ、熱田大神の前で大宮司が烏帽子親となって無事元服を果たし、名も「九郎義経」と改めたということです。

また、頼朝の向かって右側には茶色に描かれた僧体の人物が描かれています。これは京都・六波羅蜜寺が所蔵する「平清盛像」です。古記録によれば、かつて当神宮には一切経を納める輪蔵があったとされ、その輪蔵は清盛によって寄進されたと伝えられています。

崇枯盛衰、この後、これらの人物は頼朝の挙兵にはじまり争いを起こすこととなりますが、当神宮に坐す熱田大神は、争いからは程遠くあらゆる人々からの崇敬を受け、また、差別することなく、時を経て今日も崇敬者を見守ってくださっています。